

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
1938	森重香代子 色紙	森重 香代子	色紙	1	包紙	良好	下関在住の歌人・森重香代子氏揮毫の色紙。「この島に二人降り立ち闘ひし むかしの男恋ほしかるかな」と描かれており、いにしへの武蔵・巖流の闘いを偲んでいる。
1939	大田里灯先生句碑建立記念 色紙		色紙	1	包紙	良好	大田里灯氏揮毫色紙。「蟻の列 奇兵隊には姦作の墓」
1940	中島恒雄 色紙		色紙	1	包紙	多少ヤケ	平成14年7月7日、中島恒雄氏揮毫色紙。「冬の日の光まぶしく反す海の影のごとくに巖流島みゆ 恒」
1943	井上孝 色紙	井上 孝	色紙	1	包紙	良好	作家・井上孝氏揮毫の色紙。「幸福は小説にならない 井上 孝」
1944	吉岐光生 色紙		色紙	1	包紙	良好	作家・吉岐光生氏揮毫の色紙。「来し方を思い出すと/たいていぐちをこぼしたくなります しかし、そんな人がわたしは好きです 吉岐光生」
1945	林伊佐緒 色紙		色紙	1	包紙	良好	作曲家・林伊佐緒氏揮毫の色紙。「早乙女のいでたち既に神の前 伊佐緒」
1946	村上元三 色紙	村上 元三	色紙	1	包紙	全体黄ばみ	第15回直木賞受賞作家・村上元三氏揮毫の色紙。昭和24年、村上氏は夕刊 朝日新聞に「佐々木小次郎」を執筆しているときに巖流島を見に行った。後に小次郎への愛着から「小次郎の碑」を小倉の手向山公園に建立している。屏風にかたどった花崗岩には、この色紙と同じ俳句が刻まれており、関門海峡はるかに浮かぶ巖流島を眺めている。「小次郎の眉涼シけれつばくらめ 村上元三」著書に『佐々木小次郎』、『次郎長三国志』『水戸黄門』などがある。
1947	色紙		色紙	1	包紙	良好	俳人揮毫の色紙。「あの雲がおとした疑問 山頭火何処へ 圭介」
1948	中島恒雄 色紙		色紙	1	包紙	右端下方シミ有	中島恒雄氏揮毫の色紙。「ふたたびは見ざらむ國かわが船の煙は遠く片靡きすも」
2105	「放浪記」 台本			1		不良/経年劣化、表紙ほぼ剥離	林芙美子原作「放浪記」舞台化の台本。1980年代、東映本社宣伝部によって発行されたもの。
2106	VHS「放浪記」		VHS	1	「放浪記」解説	不良/経年劣化	下関市出身作家・林芙美子の著作「放浪記」を映画化(昭和37/1962)したときのニュープリント版。/主演は高峰秀子。田中絹代も母親役として出演している。
2595	田中慎弥 直筆原稿「冷たい水の羊」	田中 慎弥	A4判原稿用紙 168枚	1		良好	平成17年(2005)、田中慎弥のデビュー作品。この作品の執筆には10年をかけたという。右上の小さな穴は、当初紐で綴じるために開けられたもの。あらずじ>大橋真夫「自分はいじめられたと思わない」ことにより、それらの行為がいじめではなく論理を心の中でつぶやきながら、いじめられっ子を演じ続けていた。しかし、正義感によってその現状を打ち破ろうとする水原里子により、論理の暗示が弱まってしまふ。論理を揺るがす里子を犯し、殺し、そして後を追う。その決行のタイミングを、真夫は静かに待っていた。
2596	田中慎弥 直筆原稿「図書準備室」	田中 慎弥	A4判原稿用紙 120枚	1		良好	田中慎弥、第2作目の直筆原稿。この作品で初めての芥川賞候補となった。以降「切れた鎖」「神様のいない日本シリーズ」「第三紀層の魚」とノミネートされ、5度目の候補作となった「共喰い」で、第146回芥川賞を受賞した。あらずじ>30歳を過ぎて一度も働いたことがない「私」は、体が弱いわけでも、病気で働けない訳でもない。働く気はないが、喋る気ならいくらでもある。「私」がどうしてこんな風になってしまったのか。過去の事象にさかのぼり、その理由を語る。
2597	田中慎弥 直筆原稿「蛹」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 33枚	1		良好	この作品で、2008年当時、川端康成文学賞を最年少で受賞した。この一月後、三島由紀夫賞を受賞した際に「川端、三島、谷崎を読んでいなければ小説を書いていなかった」と、田中氏が小説を書く契機ともなった作家の名前が冠された賞を受賞した感慨を語っている。あらずじ>地上を死の世界と思い、他のかぶと虫の成虫が地上へと向かう中、想像力を持ち得た「彼」は本能に逆らい、地上で成長を続ける。
2598	田中慎弥 直筆原稿「切れた鎖」(2回目の下書き)	田中 慎弥	B4判原稿用紙 96枚	1		良好	田中氏は最初の草稿をカレンダーやFaxの裏紙に書き、それから原稿用紙に書き起こす。そうしてまた何度も推敲を加え、原稿用紙に書き直す作業を経て、本稿が仕上げられる。この草稿は2回目の下書きにあたるもの。何度も手を加え、文章を練り上げていく様子がうかがえる。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
2599	田中慎弥 直筆原稿「切れた鎖」本稿	田中 慎弥	B4判原稿用紙 104枚	1		良好	第21回三島由紀夫賞受賞作品。タイトルを挟む数字は編集者によって付け加えられたものだが、赤で入れられた文字は田中氏によるもの。あらずじ>海峡の町、赤間関で権勢を誇った桜井家。その家の裏にはいつしか新興宗教の教会が建ち、桜井家の女性は彼等の存在を否定し、憎しみを抱きながら過ごしてきた。母、自分、娘、孫娘と、四代にわたり教会との関係に苦しみながら、やがて家族は崩壊していく。
2600	田中慎弥 直筆原稿「神様のいない日本シリーズ」(下書き)	田中 慎弥	B4判原稿用紙 166枚	1		良好	
2601	田中慎弥 直筆原稿「犬と鴉」(下書き)	田中 慎弥	B4判原稿用紙 104枚	1		良好	
2602	田中慎弥 直筆原稿「燃える家」草稿	田中 慎弥	A4判FAX裏書き 69枚 (別紙2枚有)	1		良好	
2663	南部鉄瓶			1			中本たか子が綿密な調査を元にして書き上げた小説『南部鉄瓶工』が出版された後、「南部鉄瓶を有名にしてくれた」とお礼に贈呈されたもの。今日、岩手県内で生産される鉄鋳物は「南部鉄器」と呼ばれ、特に盛岡と水沢はそのふるさととして知られている。奥州藤原氏の時代に端を築くと言われる伝統の技と美は、現在も職人たちの手により受け継がれている。
3081	古川薫 直筆原稿「閉じられた海図」	古川 薫	B4判原稿用紙 294枚	1		良好	昭和62年(1987)に執筆されたもの。原題は『閉ざされた海図』。昭和63年(1988)2月、文芸春秋より『閉じられた海図』として出版された。
3082	田中慎弥 直筆原稿「冷たい水の羊」草稿「天使の役目」	田中 慎弥	B5判原稿用紙 94枚	1		良好	田中慎弥のデビュー作『冷たい水の羊』の草稿。デビュー作は10年ほどをかけて作成されており、何度も推敲が重ねられた。「天使の役目」は平成14年(2002)頃に書かれたもの。なお、田中氏の文壇デビューは平成17年(2005)。
3083	田中慎弥 直筆原稿「週末の葬儀」最終稿	田中 慎弥	B4判原稿用紙 82枚	1		良好	平成22年(2010)10月に出版された単行本、『実験』に収録されている作品「週末の葬儀」の最終稿。初出は文芸誌「新潮」2009年4月号。
3084	田中慎弥 直筆原稿「夜蜘蛛」草稿	田中 慎弥	B4判原稿用紙 181枚	1		良好	「文芸界」2012年6月号に発表された作品「夜蜘蛛」の草稿。1枚目から5枚目までは、本人の手により破棄され、残っていない。この作品は同年10月、文芸春秋より出版された。
3085	田中慎弥 直筆原稿「いか納豆」	田中 慎弥	A5判原稿用紙 49枚	1		良好	平成19年(2007)、文芸誌「新潮」4月号に「不意の償い」と改題の上発表された作品。平成20年(2008)2月に刊行された『切れた鎖』に収録されている。
3086	田中慎弥 直筆原稿「燃える家」草稿 連載第1回目分	田中 慎弥	B4判原稿用紙 112枚	1		良好	平成22年(2010)に文芸誌「群像」11月号から連載を開始し、平成25年6月に終了した小説「燃える家」。その連載第1回目分の草稿。
3087	田中慎弥 直筆原稿「第三紀層の魚」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 88枚	1		良好	平成22年(2010)、文芸誌「すばる」12月号に発表され、第144回芥川賞候補作となった作品の最終稿。平成24年(2012)1月、単行本『共喰い』に収録、集英社より出版された。
3088	田中慎弥 直筆原稿「悪魔たちの哄笑」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 12枚	1		良好	田中慎弥が三島由紀夫賞を受賞したときの記念エッセイの下書き。文芸誌「新潮」2008年7月号に掲載された。のちに西日本新聞社から出版されたエッセイ集『これからもそうだ。』に収録されている。
3089	古川薫 直筆原稿「バロサ号水兵の殺人」	古川 薫					
3090	古川薫 直筆原稿「絹代と男たち」	古川 薫					
3091	古川薫 直筆原稿「源氏物語殺人事件」	古川 薫					
3092	古川薫 直筆原稿「獅子の廊下」	古川 薫					
3093	古川薫 直筆原稿控え「突然の召喚」	古川 薫					
3094	古川薫 直筆原稿「防長古寺歴史散歩」	古川 薫					
3095	古川薫 直筆原稿「パリの大砲」	古川 薫		1	函	良好	昭和58年9月、創元社より出版された『パリの大砲』の原稿。原稿用紙を収めてある箱は、古川氏の手製。
3143	古川 薫 直筆原稿「木枯帰るところなし」	古川 薫	B4判	1		良好	平成25年度、当館において「古川薫米寿記念」企画展を開催した。その際に「将来の夢」を原稿用紙1枚にと執筆を依頼、古川氏より提出されたのがこの原稿である。「渾身の筆を振るって書きたい」と、タイトルだけは決定している作品への意気込みが綴られている。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3144	古川薫揮毫「二十一世紀への手紙」	古川 薫	本紙 縦19.6cm×横196.4cm/封筒 縦34.1cm×横37.4cm	1		良好	テレビ局の依頼で揮毫された将来への手紙。揮毫されたのは平成11年(1999)。この年は2000年という時代区分を迎えることで世間が沸いており、歴史や文化の面において、多種多様な企画や試みがなされていた。その世相にも触れ、21世紀への抱負や予想図が綴られている。「二十一世紀への手紙」全文(本文は縦書き)＞印/新世紀の麓で/古川薫/前略 二十一世紀様/あなたの世紀まで生きていられるだろうかというのが、僕の人生における大問題でありました。まあこの調子なら、どうやらたどり着けそうです。人間が便宜的にくくった百年ごとの暦ですし、時間は継ぎ目なく、よどみのない歳月をこれからも流しつづけるのです。しかし、源平合戦は、グレゴリオ暦だと一八五年五月二日(木曜日)のことでした。それから千年単位の時間の枠内—ミレニアムというのだそうですね—に僕はいたのですから、やはり何となく運命的なものを感じるのですよ。僕は二十世紀の四分の三を生きました。戦争で始まった日本の二十世紀は、修羅の時代でありました。世界大戦で地球そのものが地獄の業火に焼かれていたのです。軍隊に投げ込まれ、戦場にかり出された僕らの青春も死と隣りあわせた泥濘の中に埋れました。僕らにとっての二十一世紀は、戦前・戦後に区分されます。廃墟となった祖国に平和がおとずれた後半の人生を充足したというには、あまりにも回り道した時間の空費で、やり残したことばかり多く慚愧の荷物を、古いリヤカーに積んで、あなたの世紀に引越して行きます。僕はこれまで、主として幕末・明治の十九世紀をたしかめる仕事をしてきました。このごろようやく二十世紀に足を踏み入れた人々を形象化する作品に打ち込みました。児玉源太郎・乃木希典、桂太郎をはじめ彼ら長州の第三世代も所詮は十九世紀の子なのです。僕はといえば、僕は昭和の子でありました。僕の年齢は、昭和の年代と同じだったのです。しかし、僕が昭和という同時代について、わずかしか語ることをしなかったのはなぜだろう。それは地獄の火照りが、いつも身辺に漂っていたからでしょう。二十一世の幕あきまであと二年。あなたの世紀の窓から気分をあらためて旧世紀を振り返りながら、僕は昭和史を書こうと思っています。また時には数世紀をさかのぼる気まぐれな仕事もしたい。本年は関ヶ原の役から、ちょうど四百年目にあたります。毛利氏が遭遇した歴史の意味を問い、戦った男たちの姿を映し出してみたい。僕は残された時間が尽きるまで、二十一世紀の片隅にとどまるつもりです。よろしくお頼み申します。 艸々/一九九八年一月一日/篆刻 篆刻
3145	古川薫 直木賞候補通知10通	古川 薫	B5判	10		良好	古川薫は平成3年(1991)に、第104回直木賞を受賞した。同人誌に発表していた「走狗」が昭和40年(1965)に初めて候補となってから実に26年、10回目の候補作となった『漂泊者のアリア』で、当時最高齢となる65歳で受賞。その10回分の候補通知。直木賞候補歴＞1.昭和40年(1965)6月 第53回「走狗」(「午後」10号)/2.昭和48年(1973)12月 第70回「女体蔵志」(「午後」20号)/3.昭和49年(1974)12月 第72回「塞翁の虹」(「狼群」14号)/4.昭和52年(1977)12月 第80回『十三人の修羅』(講談社)/5.昭和53年(1978)12月 第82回「野山獄相聞抄」(「別冊文藝春秋」144号)/6.昭和55年(1980)12月 第84回「きらめき侍」(「小説新潮」7月号)「刀痕記」(「オール讀物」7月号)/7.昭和56年(1981)12月 第86回『暗殺の森』(講談社)/8.昭和63年(1988)12月 第100回『正午位置(アット・ヌーン)』(文藝春秋)/9.平成元年(1989)6月 第101回『幻のザビーネ』(文藝春秋)/10.平成3年(1991)12月 第104回『漂泊者のアリア』(文藝春秋)受賞
3146	古川薫 取材手帖 1992年	古川 薫		1	押し花、オランダ旅行行程表、ワイキキ・シェラトンホテルの領収証(1992年12月12日-12月14日滞在、1892号室)、久米美術館チケット半券、ベルリンマークホテルのメモ書き	良好	平成4年(1992)に使用していた手帖。この年の5月14日～6月5日、スウェーデン、デンマーク、スイス、オーストリア、イタリア、フランスの各地を訪れており、その旅程表が貼付されている他、イギリスへ赴いた時の取材メモ、ハワイのホテルの領収書などが挟まれている。著書「天辺の椅子」に繋がる構想メモなどもあり、執筆過程の一端を見ることが出来る。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3147	古川薫 取材手帖 1996年	古川 薫		1	98.1.1関西国際空港領収証、関空旅客サービス施設使用料領収カード(97.12.10)、NHK名刺2名分、メモ用紙(クレストンホテルのメモ用紙)	良好	平成8年(1996)に使用していた手帖。この頃『毛利元就』(文藝春秋)執筆のために取材を繰り返しており、島根県の月山富田城周辺、そして広島へ行ったときのことがメモの大部分を占めている。他にはスペイン旅行のこと、各社の編集担当者との打合せについて、日時や名前が連ねられている。
3148	古川薫 取材手帖 1998年、1999年	古川 薫		1	別冊メモ帳、新聞記事切抜、感熱紙メモ2枚、オランダの住所(後藤猛氏)、アムステルダム・日本時刻対照表、アムステルダム旅程表、「与一」メモ、ゴッホ美術館チケット半券、アムステルダム地図のコピー	良好(感熱紙メモはほとんど消えかけている)	平成10年、11年に使用していた取材手帖。オランダへのスケジュールが貼付されており、アムステルダムへ赴いたことがわかる。他、『花も嵐も』を執筆するために、田中絹代について取材を重ねたメモが散見される。
3149	古川薫 取材手帖 2001年	古川 薫		1	時差早見ダイヤルカード、自分のメールアドレスメモ、2005/12/8ホテルニューオータニブルースカイ領収証、同クレジット控え、部屋番号と携帯番号メモ	良好	平成13年に使用していた取材手帖。青銅砲のスケッチや、田中絹代の生涯を描いた『花も嵐も』(文藝春秋)の取材、また、発行部数のメモなどが見られる。宮本武蔵に関するメモも多く見られ、平成14年(2002)11月18日から平成15年(2003)5月14日まで「山口新聞」に「二天光芒-巖流島の決闘」として連載され、同年6月に出版された作品『幻談 二天光芒 宮本武蔵』(光文社)の構想段階を垣間見ることが出来る。
3150	古川薫 取材手帖 2003年	古川 薫		1	メモ「大井広介」、アドレスメモホチキス留め	良好	平成15年に使用していた取材手帖。主なメモ内容>・7月30日-8月1日、取材旅行日程表/「藤田伝三郎」についての取材メモ/・坪谷善四郎についての取材メモ/・小坂町立総合博物館スタンプ「郷土館」/・小坂町立総合博物館スタンプ「小坂駅舎」/「計器飛行装置」についてのメモ
3151	古川薫 パスポート1995-2005	古川 薫	パスポート	1		良好	平成7年(1995)-平成17年(2005)有効のパスポート。この10年の期間に、イギリス、オランダ、スペイン、カナダ、中国、フランスなど、12カ国のスタンプが押されている。
3152	古川薫 手製絵本『AIRPLANE』	古川 薫		1		やや不良(綴じ部分剥離箇所有)	「私は戦前、飛行機製作会社につとめていたこともあって、飛行機に特別の愛着を感じている。といっても例えば日本エアシステムが毎年つくっている新旧の飛行機をあしらったカレンダーを、用済み後も捨てることができず、すべて保存しているといった程度のものだ。」この「捨てることができず」にいたカレンダーを、絵本仕立てにまとめたもの。戦前から現代まで、幅広い種類の飛行機を見ることが出来る。
3153	古川薫印譜帖	古川 薫	縦16cm×横9cm×厚1.2cm	2		良好	古川氏が使用している様々な印影をまとめたもの。全部で35種。「古川薫」の印の他、号として使用している「天衣邨舎(てんいそんしゃ)」、座右の銘としての「聊以自娛(いささかをもってみずからたのしむ)」「半生心事問梅花」などが印影として使用されている。これらは手紙やサインをした書籍、色紙などにその姿を見ることが出来る。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3154	古川薫揮毫扇子「赤壁賦」「聊以自娛」	古川 薫	親骨22cm、中骨11cm、開き最大幅38cm	2	専用箱	良好/箱やや不良(ツメ欠損)	1面は古川氏が北宋(960-1276)の詩人・蘇軾の「赤壁賦」を扇子に写したものの。古川氏の著作『三国志(上)赤壁の戦い』は、この詩に依って執筆されている。また、この「赤壁賦」を何度も書き写しているため、古川氏は諳んじることが出来る。2面は「聊以自娛(いささかをもってみずからたのしむ)」と揮毫され、裏面には「赤壁賦」が記されている。
3155	古川薫作零戦プラモデル	古川 薫		1			古川氏が組み立てた零戦のプラモデル。本人曰くプロペラで実際に飛行が可能。
3157	『空飛ぶ虚ろ舟』参考図書群	古川 薫				いずれも良好	古川薫氏が著作『空飛ぶ虚ろ舟』を執筆するために熟読した書籍類。ひとつの作品を生み出すために各地へ取材に赴くだけでなく、多くの図書に目を通し、数多の事象や意見に接し、構想を練り上げている。『空飛ぶ虚ろ舟』あらすじ>世にも不思議な話「奇事異聞(きじいぶん)」を聞き集めた『兎園小説(とえんしょうせつ)』を出版するため、戯作者(げさくしゃ)として知られる滝沢馬琴(たきざわばきん)は超常現象を持ち寄って発表する「兎園会」を発足した。各地の奇事異聞が披講される中、馬琴の元に常陸国(現在の茨城県)の「虚ろ舟」の話が舞い込んでくる。息子の宗伯(そうはく)も強い興味を抱き、その真相を確かめるため彼は常陸国へと旅立った。難航した調査の末、宗伯は幕府が箱口令を敷いた真実へと辿り着く。
3158	古川薫 直筆原稿『空飛ぶ虚ろ舟』	古川 薫		1		良好	古川薫氏の著作『空飛ぶ虚ろ舟』の直筆原稿。『空飛ぶ虚ろ舟』あらすじ>世にも不思議な話「奇事異聞(きじいぶん)」を聞き集めた『兎園小説(とえんしょうせつ)』を出版するため、戯作者(げさくしゃ)として知られる滝沢馬琴(たきざわばきん)は超常現象を持ち寄って発表する「兎園会」を発足した。各地の奇事異聞が披講される中、馬琴の元に常陸国(現在の茨城県)の「虚ろ舟」の話が舞い込んでくる。息子の宗伯(そうはく)も強い興味を抱き、その真相を確かめるため彼は常陸国へと旅立った。難航した調査の末、宗伯は幕府が箱口令を敷いた真実へと辿り着く。
3159	古川薫宛岡崎正隆書簡	岡崎 正隆		109		良好	岡崎正隆氏は文藝春秋で、古川薫を20年以上にわたり担当した編集者。古川氏が直木賞を受賞し、多くの作品を刊行した傍らには、岡崎氏の活躍があった。彼が担当した古川作品は30冊を超える。この書簡には作品が生まれるまでの詳細なやりとりを含んでおり、岡崎氏が担当していた他の作家のことや、古川氏と他の作家との交流もうかがえる内容が綴られている。また、古川氏のエッセイにたびたび登場する「編集者の〇氏」は、この岡崎正隆氏のこと。
3160	古川薫 海外旅行先地図類一式	古川 薫		58		やや不良	国内の歴史を題材に小説を書くイメージの強い古川氏だが、多くの国を訪れ、取材をしている。その取材先の地図やパンフレット。いずれの国も作品として結実しており、幕末や現代小説として上梓されている。
3161	古川薫私家版『騎士アンヘルの望郷』	古川 薫	縦38.3cm×横27cm×1.6cm	1		良好	古川薫の元に、「騎士アンヘルの手記」が舞い込んできた。それは天文19年(1550)に宣教師ザビエルの一行として日本に来た、修道騎士の手記だった。「イスパニア・ナバラの勇士にして、エルサレムなる聖ヨハネ病院の至高の騎士団、別名ヨハネ騎士団さらに別名マルタ騎士団の元修道騎士アンヘル・オヘダの日本における回想」として綴られた物語を、古川氏が解題。「オール讀物」昭和62年(1987)8月号に掲載された内容を、古川薫が絵本仕立てにまとめたもの。
3162	古川薫私家版『夕焼けの祖国よ—93式中間練習機赤トンボに捧げる—』	古川 薫	A4判	2		1冊は良好。1冊はページの剥離部分有	古川薫は昭和17年(1942)の春から、日立航空機株式会社羽田工場に勤務し、零戦の製作や、「赤トンボ」の愛称で親しまれていた93式中間練習機の製作、修理に携わっていた。古川氏は修理の折「赤トンボ」1機だけに、自分の名前を小さく刻み込んだ。太平洋戦争は次第に激しくなっていくある日、古川氏の元に私信が届く。それは台湾基地にいる特攻隊員からのもので『初めてですが、これは最後の便りとなります。小生台湾基地で編成された特攻竜虎隊の者で、これから沖縄へ向かい出撃するのですが、急ぎこれを書いています。実は小生が搭乗しようとしているのは93式中間練習機であります。機内に彫られた貴殿の所属と氏名を発見いたしましたので、小生の遺書のひとつとして、お知らせいたします。貴殿が心魂かたむけて整備されたこの赤トンボで、敵艦に突っ込みます。貴殿の志を無に帰すことなく見事戦果をあげるべく頑張ります。祖国の弥栄を祈りつつ。七月二十六日』といった内容のものだった。その当時の回想と、戦争に対する思いを綴った、自らの体験記。
3163	古川薫私家版『エアロプレーンと私のかかわり』	古川 薫	縦38.0cm×横26.5cm×厚0.6cm/	1		いずれも良好	古川氏は幼い頃から飛行機に興味を抱いていた。記憶をさかのぼれる限りの飛行機との馴れ初めや、まつわる出来事をまとめたもの。
3164	古川薫私家版『エアロプレーンと私のかかわり』(附)	古川 薫	縦38.3cm×横27.2cm×厚2.5cm	1		良好	古川氏は幼い頃から飛行機に興味を抱いていた。記憶をさかのぼれる限りの飛行機との馴れ初めや、まつわる出来事をまとめたもの。こちらには「オートジャイロ郷愁」「飛翔するゼロ戦と悲恋」「練習機赤トンボのこと」が収められている。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3165	古川薫私家版『もののふ久坂玄瑞の青春』	古川 薫	縦16.5cm×横25.2cm×厚0.2cm/	2		良好	平成17年(2005)6月5日制作。総ページ数13。萩藩医の子として生まれ、後に藩士となり、蛤御門の変で散った久坂玄瑞(義助)の24年の生涯を端的にまとめた作品。玄瑞は吉田松陰の門下生となり、松下村塾では高杉晋作の双壁と称された人物。後に松陰の妹・文を嫁に貰ったこと、京都の愛人との間に子供がいたことなど、玄瑞の一生が綴られている。
3166	古川薫私家版『楊貴妃漂泊』	古川 薫	縦25.8cm×横18.4cm×厚0.3cm	1		良好	平成25年(2013)2月制作。総ページ数78。同人誌『燭台』第4号掲載に掲載された「史談楊貴妃漂泊—油谷湾に伝えよ、わが恋のかなしみ—」の抜刷。唐代の皇帝・玄宗の寵愛を一身に受け、安史の乱を引き起こしたとされる傾国・楊貴妃。彼女はその乱の折、絞殺されたと伝えられている。この作品では白楽天の「長恨歌」を解説しながら「楊貴妃生存説」に触れ、生きていた楊貴妃が山口県長門市油谷に流れ着き、そこで余生を過ごしたとされる伝説の可能性について論じている。
3167	古川薫私家版『瀑さんの幕の下ろし方』	古川 薫	縦16.0cm×横17.3cm×厚0.6cm	1		やや不良(ページ一部剥離)	平成25年(2013)6月5日発行。総ページ数20。下関出身の泉鏡花賞作家・赤江 瀑が、この年の5月に亡くなった。古川薫は生前から夫妻で交流があり、異能の作家の死を悼んでいる。その哀悼の思いを綴ったもの。散文形式で綴った古川氏の心情と、古川氏の妻で歌人の森重 香代子氏が詠んだ短歌が収められ、赤江氏の作品や思い出の写真と一緒に綴られている。
3168	古川薫私家版『パリの大砲』	古川 薫	縦14.8cm×横21.3cm×厚0.7cm(スケッチブック)	1		良好	平成25年(2013)早春発行。総ページ数40。「創元社の『パリの大砲』は豪華本でしたが、小部数で散逸してしまいました。古館さんも早くに旅立たれました。しきりに懐かしく、スケッチ・ブックに「追懐抄」を縮めました。」古川氏は取材旅行の途次、パリのアンヴァリッド軍事博物館でそのとき接收された大砲を発見する。長州砲発見までの記録と、長州砲についての解説、また、最初の返還交渉が拒絶されたことまでの経緯が詳細に記された既刊『パリの大砲』をスケッチブックにまとめた詩画集。挿画は取材当時パリを一緒に訪れた古館充臣氏のもの。
3169	古川薫私家版『欧羅巴周遊』	古川 薫	縦16.0cm×横17.3cm×厚0.7cm	1		良好	「岩倉使節団の跡を追って 1992 古川薫」総ページ数20。岩倉具視率いる岩倉使節団の足跡をたどり、取材を行った古川薫。彼が各地で見聞し、感じたことを詩や絵に表したもの。ホテルの部屋に置かれているメモ用紙に綴られており、「異国の情緒」を伝える作品となっている。
3170	古川薫私家版『幻の青銅砲を追う』	古川 薫	縦22.6cm×横30.7cm×厚1.3cm	1		良好	平成23年(2011)制作。総ページ数49。古川薫はスペインへの取材旅行の途次、幕末の攘夷戦の折に接收された長州砲の姿を見つける。そこから34年にわたり各国に眠る長州砲の行方を調べ、複数の作品として世に送り出した。これら上梓された作品を、また改めてまとめたものがこの私家版。中には長州砲の拓本のコピーなども綴られている。
3171	古川薫私家版『ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン 交響曲第八番第二楽章』	古川 薫	縦25.4cm×横18.6cm×厚0.8cm	1		良好	平成25年(2013)10月10日発行。総ページ数16。古川氏はペンネームを「部戸 勉」にしようとしたほど、音楽家ベートーベンに強い魅力を感じている。その思いの丈を綴った作品。巻末には次のように記されている。「これはぼくが自分のために書き遺すベートーヴェンの覚書きであり、ほかに『エアロプレーンと私の関わり』『ベルトラン/朝のガスパール』『ヘンリー・ジェームス/デイズ・ミラー覚書』などに仲間入りする私家版の一冊です。照部数を謄写し、独善的・独断的・趣味的かつペダンティックな部分は読み流してくれるであろうと信じられる身辺の人々にだけしめした手記であります。したがって異論を差し挟む理由はさらさらないことを断っておきます。」
3172	古川薫私家版『パリの大砲』(ミニアルバム)	古川 薫	縦16.0cm×横17.7cm×厚0.7cm(ミニアルバム)	1		良好	発行年月不明。総ページ数1。見開きと最初のページだけに印刷物が貼付しており、以降は何もない。制作途中だった未完の版か。
3173	古川薫私家版『落葉の詩(うた) 古川薫編』	古川 薫	縦15.4cm×横17.1cm×厚1.0cm	1		良好	制年月不明。総ページ数19。巻末に「十時の会へ」という詩が収められており、以前文章指導を行っていたときに作成したものか。「落葉」の詩をあつめて書写し、アルバムにしたもの。収録されている作品は以下のとおり。/・「落葉」ポール・ヴェルレーヌ/上田 敏 訳/・「秋の祈」高村光太郎/・「含羞(はぢらひ)—在りし日の歌—」中原中也/・「鳥の手紙」西条八十/・短歌 吉井勇、船王、中村憲吉、柿本人麻呂/・俳句 飯田蛇笏、水原秋桜子、古川薫/・七言絶句 高杉晋作
3178	古川薫制作ポスター	古川 薫		10	額	良好	古川氏が、「自身の作品が舞台化、映画化された折にはこんなイメージのポスターがいい」と、自らイメージして制作したポスター類。
3179	古川薫揮毫色紙	古川 薫	縦27.3cm×横24.2cm	1		良好	古川薫が平成3年(1991)に揮毫した色紙。「谷間を行く夢の狩人 古川薫」
3180	古川薫揮毫色紙	古川 薫	縦27.3cm×横24.2cm	1		やや不良	古川薫が揮毫した色紙。「潮の流れとお酒の味は溶けて流れてとんとんとろりととんとんとろりと恋渡る 薫」
3262	船戸与一 直筆原稿「国家と犯罪」	船戸 与一	B4判原稿用紙	1			船戸与一著作『国家と犯罪』の直筆原稿。B4判原稿用紙に鉛筆書きで、総枚数は500枚を超える。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3263	船戸与一写真			5			作家・船戸与一の海外取材の写真や、イベント、プライベートでの写真など90枚をパネルにしたもの。複数のカメラマンが撮影しているが、写真の8割以上が現地取材に同行したジャーナリスト恵谷治(えやおさむ)氏によるもの。※この写真の使用申請を行う場合、提供元である小学館に許可をとる必要があります。
3264	船戸与一書簡	船戸 与一		1			「船戸与一」がデビューする前に出した講談社編集者宛の手紙。全3枚。本名・原田建司の名前で出されている。昭和19年(1944)に下関に生まれた彼は、県立下関西高等学校を卒業後は早稲田大学に進学、そこで探検部に入り、日韓正常化以前の韓国や、ベーリング海峡横断のために冬のアラスカなどを経験する。卒業後は出版社に勤めるも退社し、ルポライターとして活躍、「豊浦志朗」の名前で著作を出版。昭和50年(1975)夏、豊浦志朗著「叛アメリカ史」を読んでいた講談社の編集者が小説を書かせたいと本人を口説いた。初めは社交辞令ととっていた彼もその熱意に押され、「非合法員」の執筆に取りかかる。そうして作品が単行本化され、作家「船戸与一」が誕生した。手紙全文>前略。準備稿の段階ですが、構想全体の半分を通過したところ。 (もちろん、このことは完成したらかならず出版せよ、という脅迫を秘めているものでは断じてありません)。出版されようとされまいと、来年二月いっぱいには脱稿の予定です。(はじめたことは一応、ケリをつけないと背中がモゾモゾして不健康なもので…)。お申し越しの件につき以下に列挙します。以上が大雑把な内容です。後半、神代恒彦がCIAを相手に派手に活躍するストーリーも考えましたが、それをやると、(物語がではなく)私の想いが完結しすぎ、(現代の私/の気持がそこまで発展していないのに)、低レベルで決着することになり、イメージの次の発展成長の芽をつみとられそうな気がします。だからいまいったん、神代恒彦の行動が反革命から革命へと転じようとした瞬間に殺される、というところに留めておきたいと思います。ただ、反革命から革命へと転じようとした瞬間に殺される、というところに留めておきたいと思います。ただ、反革命から革命へという変化・転回は豊かに描きたいと息こんでいます。(うまくいかどうかは力量の問題ですから訊かないでください。ただ、現在の私の志はそうです)。以上、これが小説として成立する作品となるかどうかはまだわかりませんが、一応の報告です。疑問の点があれば、御電話いただければ幸いです。 敬具 12月14日 原田建司/白川充様/本文は縦書き、万年筆書。
3265	「蝦夷地別件」ボトル		750mlボトル	1			船戸与一が第14回日本冒険小説協会大賞を受賞した記念に、ファンから贈られた濁り酒。船戸もよく通っていた新宿歌舞伎町のバー「深夜+1」の棚に永らく飾られていた。
3266	帆船「与一丸」			1			船戸与一が著作『蝦夷地別件』で第14回日本冒険小説協会大賞を受賞した記念に、ファンから贈られた帆船模型。
3267	特別装幀『虹の谷の五月』	船戸 与一	四六判上製カバー装箱入	1		良好	船戸与一は平成12年(2000)『虹の谷の五月』で直木賞を受賞。その記念に集英社から贈られた特別装幀版(一般には販売されていない)。
3268	早稲田大学探検部OB会贈呈地球儀			1			大学時代、船戸は早稲田大学の探検部に所属していた。『虹の谷の五月』の直木賞受賞を祝う探検部OB会により贈呈されたもの。
3269	船戸与一 直筆原稿「満州国演義」第4巻～第9巻	船戸 与一	B4判原稿用紙	6		良好(一部破れ有)	船戸与一著『満州国演義』の直筆原稿。現存しているのは第4巻「炎の回廊」から第9巻「残夢の骸」までの六作品分のみ。
3270	船戸与一愛用の筆	船戸 与一					原稿にタイトルや書名をするときなどに使用していた筆各種。
3271	赤間関硯「波濤研」堀尾信夫作			1	箱、由緒書き、帛紗	良好	船戸与一の著作『砂のクロニクル』が第五回山本周五郎賞を受賞したことを祝い、平成4年9月29日、下関で祝賀会「船戸与一さんをかこむ会」が開かれた。そのときに記念として贈られたもの。
3272	船戸与一 直筆原稿「稲妻の秋」	船戸 与一	B4判原稿用紙	1		良好	文芸誌「ジャーロNo.53」(光文社)に掲載された作品。これが船戸与一の絶筆となった。
3273	第18回日本ミステリー文学大賞賞状			1			「わが国のミステリー文学の発展に著しく寄与した作家および評論家」を対象に、光文社から贈られる賞。船戸与一の長年の功績に対してこの賞が授与された。授賞式は平成27年(2015)3月18日、帝国ホテルで開催、船戸与一は末期癌の身体を押して車椅子で出席した。
3274	第18回日本ミステリー文学大賞正賞シエラザード像			1			「わが国のミステリー文学の発展に著しく寄与した作家および評論家」を対象に、光文社から贈られる賞。船戸与一の長年の功績に対してこの賞が授与された。授賞式は平成27年(2015)3月18日、帝国ホテルで開催、船戸与一は末期癌の身体を押して車椅子で出席した。
3275	船戸与一、探検部時代の写真			1			最後列で煙草を吸っているのが本人。早大探検部第二次冬期ベーリング海峡横断隊単独越冬隊として、アラスカのウェールズ村に滞在していた当時の原田建司(22歳)。このとき猟銃射撃を初体験する。

資料ID	資料名	資料作家名	サイズ	個数	付属品	資料状態	公開解説
3276	船戸与一、『満州国演義』執筆中の書斎にて			1			2011年2月に撮影された船戸与一。撮影者は太田真三(小学館写真室)。※この写真の使用申請には撮影者の許可を必要とします。
3277	船戸与一、「満州国演義」を書き終えて			1			撮影日>2015年2月/撮影者>三島 正(フリーカメラマン) 『満州国演義』最終巻を書き終えた船戸与一。総原稿枚数は7500枚超、約8年にわたった同作終了の感想を問うと、「今は脱力感だな。やれやれという以外、感想はない」。この数日後に体調を崩して入院することになったため、これが生前最後の全身写真となった。
3278	第123回直木三十五賞正賞 懐中時計			1		良好	船戸与一は平成12年(2000)、『虹の谷の五月』で直木賞を受賞。そのときの正賞。
3279	早稲田大学卒業証書			1			
3280	船戸与一写真(19歳)			1			
3281	モデルガン COLT GOVERNMENT Mark-IV SERIES' 70			1			船戸与一が著作『山猫の夏』で第3回日本冒険小説協会大賞を受賞。その記念に贈られたもの。
3282	モデルガン ベレッタM92(MGC製)			1			平成3年(1991)、船戸与一が著作『砂のクロニクル』で第10回日本冒険小説協会大賞を受賞。その記念に贈られたもの。
3283	船戸与一、愛用のカメラ			1			船戸与一が長年使用していた一眼レフカメラ。Nikomax。うしろには「K.HARADA」と名前(本名・原田建司)が入っている。
3288	DVD「超弩級ミステリー 龍神町龍神十三番地」	船戸 与一	DVD	1		良好	船戸与一原作「龍神町龍神十三番地」(徳間書店)がTBSによって映像化されたもの。出演者>佐藤浩市、高島礼子、宇崎童童、小島聖、山本未来、岡本綾、佐野史郎、椎名桔平、柴田恭兵 ほか
3293	船戸与一写真	船戸 与一	KGサイズ	7			下関で活躍する写真家、吉岡一生によって撮影された船戸与一の肖像写真。
3295	古川薫 肖像写真			1枚			古川薫90歳の肖像写真。
3296	田中慎弥 「燃える家」草稿	田中 慎弥					田中慎弥著作『燃える家』の草稿。FAXや原稿の裏紙などを利用してびっしりと書かれている。
3297	赤江瀑肖像写真		KGサイズ	4			下関で活躍する写真家・吉岡一生による赤江瀑の写真。
3337	田中慎弥 直筆原稿「書評・わかれ」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 4枚	1		良好	瀬戸内寂聴著『わかれ』の書評。新潮社が発行している販促誌『波』2015年11月号に掲載されたもの。
3338	田中慎弥 直筆原稿「掌劇場 あとがき」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 1枚	1		良好	毎日新聞社より刊行された著書『田中慎弥の掌劇場』2冊目のあとがき。1冊目は平成24年(2012)4月に発行されている。
3339	田中慎弥 直筆原稿「権威でありたい」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 7枚	1		良好	北九州市にある松本清張記念館の研究誌第17号(2016年3月刊)に寄せたエッセイ。
3340	田中慎弥 直筆原稿「死体」	田中 慎弥	B4判原稿用紙 24枚	1		良好	文芸誌『新潮』2016年1月号に掲載された短編作品。
3341	田中慎弥 草稿ノート	田中 慎弥	B5判大学ノート	1		良好	代表作のひとつ『切れた鎖』や「聖書の煙草」など、複数作品の草稿が書き込まれたノート。多くのメモも挟み込まれている。